

徳島市内河川網における川づくりについて

徳島県土木部河川課 正会員 湯浅弘成

1 徳島市の現在の状況

徳島市は徳島県の県庁所在地であり、徳島の政治、経済、文化の中心である。また、昨年（1994）の9月には関西新国際空港が開港し、そして3年後の明石海峡大橋の開通時には、益々徳島県内のみならず、四国の玄関として重要な位置づけを担っていくものと思う。昨年3月には日本では最後になったが高速道路の開通し、本年夏頃には徳島市まで伸ばすべく現在工事が急ピッチで進められている。

2 徳島市の河川の歴史

徳島市は四国三郎の名で知られる吉野川の河口に広がる三角州上の街である。一部町村合併などにより山地部を含むものの、概ね沖積平野にその市域はある。また、昭和21年の南海道地震によって大きな地盤沈下がありかなり低い土地も見受けられる。徳島市内には138もの河川があるが、それはもともと吉野川の氾濫源に発達したためではないかと考えられる。

徳島市はかつて豊臣氏の家臣であった25万石の蜂須賀公が治めていた。城山にあった徳島城は平城であることから戦略的に城を守るため、ぐるりに外堀をめぐらし敵の侵入を防いでいたのではないと思う。また、当時はいろんな物資輸送については海上輸送が主であり、舟運が重要な役割を果たしていた。そのため川幅や水深については、船のことを考慮に入れたものになっていた。藍がその当時の藩の財政に重要な役割を果たしており、新町川の川岸には藍倉がたくさん建っていた。

それが明治の時代になり戦略的意味もなくなり、道路整備などにより多くの河川に橋が架けられるようになった。また、徳島市の人口が増加し、一方河川の利用が廃れるにつれ、水辺の埋立が始まった。かつて寺島川はJR牟岐線沿いにあったが、現在はほとんど埋められ、一部徳島中央公園の堀にその面影を見ることができる。新町川や助任川にしても今の川幅の倍近いところもあった。そのようにして川を埋めたあとに公共施設やいろんな建物が建っている。沼沢地も海岸近くにはあったが、埋められ不透水層が拡大していった。更に当時は、河川は水面貯木にも多く使用されていた。それが昭和36年9月の第二室戸台風により水面貯木していた木の多くが流れ出て甚大な被害をもたらした。そのため河川での水面貯木はその後なくなった。昭和36年から河川災害復旧助成事業で市内のほぼ全域に渡って高潮対応の特殊堤のコンクリートで覆われた。しかし、そのパラペットがその後の河川に対し、人々を遠ざける結果になったように思う。また、橋梁を架設する場合にも堤内地が低いと道路の縦断勾配が相当にきついものになる原因にもなっている。

その後の経済成長の中で、徳島市への人口、産業の集中が行われ、工場排水の垂れ流し、生活雑排水の流入により新町川周辺においてもメタンガスが発生するほどに水質が悪化した。そうした中、昭和46年より水質悪化の原因となっている底質汚泥の浚渫を河川環境整備事業（浄化事業）で行っている。昭和62年までに浚渫に関しては完了し、現在は橋梁の下とか護岸の際掘を行い、河床工なる捨石で被覆をしている。

また、水質汚濁防止法等の法律面の整備も進み、排水規制も功を奏して昭和50年頃には、BOD値においてかなり改善の兆しがあった。更に、昭和50年からは直轄河川環境整備事業で吉野川からのきれいな水を新町川に導水して浄化をする浄化導水事業も始まった。全体計画10m³/sのポンプ3台を稼働させて浄化を行うもので、平成6年度までに完成した。このようにして水質は相当に改善され、平成7年1月には40年ぶりに寒中水泳が復活した。

3. 徳島市内の河川整備

新町川をはじめとする市内河川網において、その整備が大きく進んだのは何といっても昭和62年に建設省から「ふるさとの川モデル河川」の指定を受けたことではないかと思う。その整備方針は、基本理念とし

て「水と緑のまちづくり」を掲げ、徳島市内を網の目のように流れるいわゆる環濠河川をまちづくりと一体となって整備をしていくものである。

大きくは2つの地域に分かれ、都市部の新町川及び助任川等の地域、まだ自然が多く残っている多々羅川及び園瀬川の地域で、それぞれの特性を生かした整備を進めていくことになった。

徳島市が昭和60年地方都市中心市街地活性化計画（シェイプアップマイタウン計画）の認定を受けて、うるおいのあるまちづくりを目指し、新町川水際公園が徳島県と徳島市により平成元年に完成した。これは護岸部分を河川環境整備事業（河道整備）で、公園部分を徳島市の公園事業で行った。こうした取り組みに相呼応して、市民のボランティアグループである「新町川を守る会」がその翌年に発足し新町川及びその周辺で月2回河川の清掃活動を積極的に行っている。徳島県においてそのようなボランティアグループを支援する意味もあり、また、広く河川への啓発活動を押し進めるために平成3年度から「うるおいのある水辺づくり基金」を作り、8億円まで積み立てていく予定である。更に、その運用益により「ラブリバー推進事業」でもって各種事業に補助を行っている。

一方、自然が多く残っている多々羅川においては、水草が茂り、多くの水鳥も生息しているため多自然型川づくりで、野鳥観察小屋を作ったり、護岸を被覆土砂で覆うなどの自然に配慮した整備を行った。更に、河畔林をなるべく残して緑を多く取り入れた。護岸の勾配も相当に緩いところも作り水に触れるような箇所も整備した。

平成5年には徳島市制100周年事業の一環で助任川河岸緑地が完成し、現在は藩政の松が多く残る中徳島河畔緑地の整備を行っている。

一方、徳島市においても、これらのトータルデザインとして「ひょうたん島水と緑のネットワーク構想」グランドデザインが学識経験者、地元住民、行政委員による検討委員会を経て策定された。そしてまちづくりと一体となった整備が展開されてきている。

県の単独事業として、平成元年からは土木施設景観創造事業が始まり、従来のコンクリート護岸の表面に徳島県産の青石を張って整備を行い、緑の少ない所にはツタを垂らすなどして緑が映えるようにした。平成3年度からは、リバーフロント整備事業として、人々が川から遠ざかっていたのを川に引きつけるような遊歩道や階段護岸の整備を公園管理者と一体となって整備を行ってきている。

4. ソフト面の取り組み

以上のようなハード面ばかりではなく、県市地元が一体となって「ラブリバーフェスティバル実行委員会」を作り、毎年多くのイベントを行っている。「新町川を守る会」の会長さんの口癖は「もっともっと川で遊ばないと駄目である。楽しめるような川でないといけない。」ということで、人々が川に関心を持てば、よりよい川になっていくように思う。

また、平成5年7月には「新町川及びその支川（田宮川・大岡川）」が、清流ルネッサンス21の指定を受けた。これは今世紀中に水環境の悪化している河川、湖沼、ダム湖において、河川と下水道等が一体となって改善をしようとするもので、現在地域協議会を設立して水環境改善緊急行動計画の策定に向けて準備を進めている。

最近では、未来への碧き流れ－新町川を語る会懇談会を発足させて、今後の川づくりについて広く各階各層の方々から意見やら提言を聞いてまちづくりと一体となった河川整備構想を作っていく予定である。

このようにして新町川を含めた市内河川網は何かと話題が豊富ではあるが、計画は遠大であり、また、30年近くなるコンクリート護岸の老朽化も目立つようになり、まだまだ手を入れたいといけないことも多く残されている。今後とも整備構想等を踏まえてよりよい川づくりに努力していきたいと考えている。